『多元文化交流』第 16 號(2024 年 6 月)
〈特集〉:ポピュラーカルチャーの交流と社会形成

安全保障、解放と統治
―アニメ『PSYCHO-PASS』における監視の表象―

中村 麻理

要旨

本稿は SF アニメシリーズ『PSYCHO-PASS』が安全保障・解放・統治の弁証法的関係をどのように描いているかを分析し、ポピュラーカルチャーを通して安全保障に関する議論を深めることを目的とする。「安全保障」という用語は、個人、社会、国家、国際的なレベルにおける危険や脅威の状態からの自由を指し、国家安全保障、個人的安全保障や国際社会の安全保障を含む。しかしその理解は一様ではない。例えば、安全保障研究の分野で個人と集団の解放は安全保障の一形態であると捉える議論がある一方、ミシェル・フーコーは安全保障が権力と統治に密接に関連していると論じる。本稿では『サイコパス』における監視の表象を例に安全保障が持つ解放的な性格、権力を産出する技術やその影響を検証する。また、アニメを通して政治思想を研究することが有意義なアプローチであると論じる。

キーワード

アニメ、PSYCHO-PASS サイコパス、監視、安全保障、統治性

中村 麻理
安全保障、解放と統治
（投稿論文）

1. はじめに

本稿では、二〇一二年から二〇一三年に放送されたテレビアニメシリーズ『PSYCHO-PASS』（以下サイコパス）[1]を分析し、この作品が高度監視社会における安全保障・解放・統治の弁証法的関係をどのように描いているかを考察する。『サイコパス』は、塩谷直義監督、プロダクションI.G.制作、本広克行総監督による作品である。舞台は二十二世紀の日本。そこでは、人々の心理状態や性格、反社会的行動の傾向を測定・監視する新技術が使用されている。この技術は、二〇一九年のコロナウイルス流行の際に中華人民共和国で使用された個人の特定、検査履歴や行動履歴を管理する健康コード（Health Code）を更に進化させたようなものである。この世界で、政府は「シビュラシステム」とも呼ばれる強力な監視・福祉システムを構築し、国民の生体反応や心理状態を数値化した「サイコパス」を随時監視している。このシステムではまた犯罪を犯す可能性が高い確率を示す「犯罪係数」も算出され、 犯罪係数が通常より高ければ、その人物は潜在的な犯罪者「潜在犯」と特定され、公安局に逮捕されるか、矯正施設に送られることとなる。

物語は、一連の犯罪を捜査する警察官たちの群像劇だ。主人公の常守朱は公安局刑事課の新人監視官。彼女の仕事は執行官とともに犯罪者や潜在犯を取り締ることだ。彼らは全員「ドミネーター」と呼ばれる特殊兵器を携帯する。これは警察が犯罪者や潜在的な犯罪者を射殺するために使用する武器で、（潜在的な）犯罪者かどうか、排除すべきかどうかを判断するシビュラシステムに直結している。監視官や執行官は、職務上シビュラシステムの判断に従わなければならない。このシステムの導入により、政府は将来起こり得る犯罪を察知することで、犯罪を未然に防ぐことができるため治安は大幅に改善した。この社会では、国民は安全と安定を享受しているが、同時にシビュラシステムの全面的な管理下にある。

つまり、『サイコパス』は、犯罪は未然に防ぐことができるという信念に基づいており、フィリップ・K・ディックの短編小説およびスティーブン・スピルバーグ監督によって映画化された『マイノリティ・リポート』に類似した状況なのである。ストーリーの原案と脚本を担当した虚淵玄は、フィリップ・K・ディックの世界をアニメーションで作りたかったと述べている[2]。フィリッポ・チェルヴェッリ（Filippo Cervelli）は、『サイコパス』を東西のユートピアの表象の歴史と現代日本社会の文脈の中で考察し、同作品が描くディストピア的側面の中核に人々の批判的思考の停止と社会に浸透する現在主義（presentism）があると指摘する[3]。

『サイコパス』は、私たちをデジタル監視の世界に導き、監視がどのように生命を管理し、調整する政治技術の一形態となるかを提示し、社会の治安維持や秩序の保持といった安全保障の問題を批判的に考える手がかりとなる。フィクションや映画といったポップカルチャーは、「長い間、監視の慣行や傾向について、鮮明に挑発的かつ批判的な描写を提供してきた」[4]。研究者にとってポップカルチャーは「刺激的な参考資料」となり得る[5]。実際、監視に関する問題は、小説や映画などのポップカルチャー、特に SF ジャンルで頻繁に取り上げられている。「監視のイメージは、一方でフィクション、映画、歌詞、その他のメディアに入り込んでいるが、他方では、メディアが監視に対する態度や行動を形成しうるため、監視自体もポップカルチャーの影響を受けている」[6]。本稿では、政治思想の思考実験として、テレビアニメシリーズ『サイコパス』における監視の表象を例に「安全保障」「解放」「統治」の弁証法的関係を批判的に検討する。

国際政治学の分野で、「安全保障」という用語はしばしば、個人、社会、国家、国際社会が危険や脅威から解放されている状態や認識を指すのに使われ、個人の安全保障、国家の安全保障、国際社会の安全保障などを含む。安全保障の概念が私たちの日常生活においてますます重要な役割を果たすようになるにつれ、国際政治理論において、安全保障は啓蒙主義に触発された人間の「解放」の重要な様式とみなされるようになった。

イギリスの国際理論家ケン・ブース(Ken Booth)は、安全保障研究(その理論と実践を含む)は、人間の個人と集団の解放に関心を持つべきだと主張する。なぜなら、解放こそが真の安全保障を生み出すものであり、伝統的な政治的リアリズムの関心事である権力や秩序ではないからである[7]。この理解では、「安全保障」は反権力、反支配と定義される。これとは対照的に、哲学者ミシェル・フーコー(Michel Foucault)は、安全保障の実践において何が問題となっているか、権力と秩序という広範な問題との関係について異なる見解を示している。フーコーは、権力、統治(あるいは支配)、安全保障は密接に関連していると主張する。安全保障は人間の解放を達成するものではなく、むしろ実際には規律、規律、統治、とりわけ権力の支配の道具なのである。

本稿では『サイコパス』に登場するさまざまな監視に関する知識やテクノロジーを分析し、その政治的意味を検証する。同作品は、デジタル監視の状況の中で人々がどのように生き、折り合いをつけていくかという問題を扱っている。『サイコパス』において、人々はシステム上に構築されたデジタル監視社会が公正で善良な社会であると信じており、人々の安全と幸福を最大化するため

に、あらゆるリスクや不確実性を最小化したいと望んでいる。よってブースの「安全と解放」の理論を裏付けることになる。

しかしその一方、公共の安全を維持するために、人々は、個人であれ、社会であれ、国家であれ、絶えず監視され、検知され、再配置され、あるいは排除される。人々の行動に関する知識の集積は、フーコーが「governmentality」（統治性）と捉えるように、公共の安全のために人々の生活と健康を効果的に管理する枠組みを構築している。つまり、アニメで描かれる安全保障は、解放の一形態ではなく、権力、規律、統治、そして何よりも支配の道具であり、思考実験としての『サイコパス』は、ブースの解放論に対する反例なのだ。

本稿ではアニメの分析を通して安全保障が持つ解放的な性格、権力を産出する技術やその影響を検証することで、安全保障の議論を深め、アニメを通して政治思想を研究することが有意義なアプローチであると論じる。

以下ではまず、安全保障に対する二つの相反する議論、ブースの「解放としての安全保障」の議論とフーコーの「統治性」の議論を検討する。 続いて、権力のさまざまな形態と技術が『サイコパス』においてどのように表現されているかを検証する。 最後に解放としての安全保障は必然的に新たな統治形態を生み出すと結論づける。

2. 安全保障をめぐる二つの議論

2.1 解放としての安全保障

国際関係学者ケン・ブース（Ken Booth）とリチャード・ウィン・ジョーンズ（Richard Wyn Jones）は、安全保障研究(security studies)の課題を批判理論の伝統の中に位置づけ、戦争と国家に対する軍事的脅威のみに焦点を当てる従来の安全保障研究の課題と方法論に疑問を投げかけた。彼らは安全保障研究を啓蒙主義に影響された人間解放の概念と結びつけ、安全保障研究を伝統的な「軍事力の脅威、使用、統制」と定義することに異議を唱え、新たな批判的安全保障研究（critical security studies） を提案している。

「安全保障と解放（Security and Emancipation）」と題されたブースの最も影響力のある一九九〇年の論考の中で、ブースは安全保障の概念を再定義し、それを人間個人の解放と同一視している。

> 安全保障とは脅威の不在を意味する。解放とは、人々が(個人や集団として)物質的・人間的制約から解放され、自由に選択した行動ができるようになることである。戦争や戦争の脅威は、貧困、貧しい教育、政治的抑圧などとともに、こうした制約のひとつにすぎない。安全保障と解放は表裏一体である。権力や秩序が真の安全保障を生み出すのではなく、解放が生み出すのだ。つまり、解放こそが安全保障なのだ[8]。

ブースは、安全保障研究はその領域を国家的(軍事的)安全保障に限定すべきではなく、人間個人の自由意志の追求を妨げている他のあらゆる課題にまで対象を広げるべきだと考えた。ブースの弟子であるウィン・ジョーンズ(1999)は、ブースの見解をさらに発展させ、批判的方法論と内在的批評の重要性を強調し、安全保障の主要な領域として、軍事、環境、経済、政治、社会の五つを挙げる[9]。

さらに、ブースとウィン・ジョーンズは、解放を静的な状態や固定された目標とは考えておらず、むしろ解放を「終着点ではなくプロセス、目的地ではなく方向である」と捉えている[10]。特にウィン・ジョーンズにとって、解放は「具体的なユートピア」の一形態として理解されるものではなく、理想社会を備えた固定された青写真でもない。むしろそれは、特定の空間的・時間的コンテクストにおいて個人と集団が経験するさまざまな懸念を特定し続けるプロセスであり、ウィン・ジョーンズは「より解放的な秩序が確立されたとしても、解放のプロセスはまだ不完全である。常に改善の余地があり、解放という課題は未完成のままである」と指摘する[11]。言い換えれば、ブースとその支持者たちにとって、解放は安全保障の前提条件であり、解放と安全保障は表裏一体なのである。

安全保障を解放として理解するブースとウィン・ジョーンズの批判的なアプローチは、安全保障の議論を広げ多くの批判を集めた。例えば、ヘイワード・アルカー(Hayward Alker)をはじめとする多くの批評家は、解放の「進歩的な」意味合いが覇権主義的な危険となりうることを警告している[12]。植民地主義も帝国主義も、「解放的」と認識され、それゆえに正当化されてきた実践なのである。

さらに、ブースの議論は、真の安全保障は解放が達成された後にのみ存在しうるという考え(そして解放と安全保障の概念的な等価性)に基づくが、実際には、安全保障そのものが近代的な監視の拡大を正当化する主な根拠となっており、個人の選択の自由に対する制限を強めている。

監視は、差し迫った脅威であれ、将来の脅威であれ、あらゆる種類の脅威に対処するための重要なメカニズムである。たとえば近年では、地球温暖化、環境の悪化、原発事故、テロリズム、移民、自然災害、資源の枯渇といった脅威に対する人間の対応の中心に監視がある。大規模な監視システム（識別、監視、追跡、管理）は、安全保障を達成するための重要な手段と認識されてきた。

言い換えれば、ブースとウィン・ジョーンズが理解する安全保障とは、制限や恐怖からの自由であり、よい生活への鍵である一方、安全保障を達成するためには、個人であれ、集団であれ、社会であれ、国家であれ、物理的・自然的世界であれ、脅威、危険や異常とみなされるあらゆる対象に対して、微視的な規制や 監視、調査を行うことが避けられない。監視の対象は、犯罪者、移民、テロリスト集団、宗教集団、敵対国家などの他に環境の変化、科学技術、食物連鎖やその他の人間以外の生物やウィルスをも含む。安全保障の任務とは、起こりうるすべてのリスクを予測することなのである。

それに加え、脅威、危険や異常の意味は、しばしばアイデンティティに基づくことも忘れてはならない。例えば、国際関係学者デイヴィッド・キャンベル（David Campbell）は、脅威とはそれ自体が脅威であるものは何もなく、むしろそれは人々が「物事を解釈する際の危険のさまざまな次元」をどのように認識するかにかかっていると論じている[13]。

キャンベルによれば、私たちの日常生活には、身体的危害や死につながる危険（例えば、車の運転）が数多く存在するが、すべての危険性が等価とみなされるわけではない。実際の脅威の程度は、行為者が自分自身をどのように認識するか、そして彼らのアイデンティティによって左右される。キャンベルは、危険は客観的な条件ではない、脅威、危険や異常は、本質的な、或いは必要な存在というよりはむしろ「解釈の影響」(an affect of interpretation)として捉えられるべきだと指摘する[14]。この場合、安全も脅威も、アイデンティティから生み出される知覚である。さらに、行為者の危険に対する知覚の構築にとってアイデンティティがそれほど重要であるならば、行為者の安全に対する理解とそれに対応する行動を理解するために、アイデンティティがいかに構築されるかをさらに探求する必要がある。

ポスト構造主義の観点からすれば、アイデンティティは「存在の不可避な次元」(an inescapable dimension of being)である[15]。しかし、この理解はアイデンティティが自然に与えられ固有のもので

あるという意味ではない。それどころか、アイデンティティは自然に与えられたものでも、固定されたものでもなく、むしろ人々の行動様式の中に存在するのである。

この点に関して、ジュディス・バトラー(Judith Butler)は、アイデンティティがパフォーマティブであると主張する[16]。バトラーは、ジェンダー・アイデンティティが時間とともにどのように構築されるかを単純化した例として、ジェンダーは本来備わっているものではなく、言説や権力関係の観点から時間とともに社会的に構築されるものであると指摘する。よって、ジェンダーは変化するものであり、「規則的で反復的なプロセス」なのである[17]。私たちが常に一定のふるまいをしたからといって、それが私たちの本来のあり方であるとは限らない。

さらにアイデンティティは、同一性という対比を通して提示される差異によっても構築される。異なる感覚やアイデンティティを持つ他者の存在は、明確なアイデンティティを提示しようとする集団にとって脅威となることが多い。その脅威は、小さな集団(例えば、同性愛者コミュニティ)から世界的なレベル(例えば、いわゆるならず者国家)まで多岐にわたる。規模が異なれば利害関係も異なり、相対的な安全感を再確立するために、脅威への具体的な対応策を講じる動機付けとなる。同時に、アイデンティティはパフォーマティブであるため、見かけ上安定したアイデンティティを維持し、再生産するためには、行為者によるパフォーマンスが必要であり、危険に直面することは、そのようなパフォーマンスの絶好の機会となるのだ。

言い換えれば、安全保障の問題は、アイデンティティと差異の政治学と密接に関係している。脅威と危険の言説は、実際、行為者のアイデンティティの作用であり基盤である。一方で、アイデンティティは自己同一化を通じて「他者」を定義し、脅威と危険の言説を生み出す。またその一方で、それは行為者が常に自分が何者であり、他者と比較してどのような価値を保持すべきかを定義する助けとなる。

キャンベルは 国際関係を例に挙げ、「脅威は、外交政策に支援された自己の主観的構築という形で再生産される」と論じる[18]。国家の外交政策に対するこうした視点によって、国家は見かけほど安定しているわけではなく、本質的に両義的であり、本当の意味での「弁証法以前の」アイデンティティを有していないことがわかる[19]。そして、彼らが固有のアイデンティティを持たないがゆえに、直面する危険もまた固定されたものではなく、彼らがその時点で自分のアイデンティティをどう認識しているかに左右される。この点で、安全とは固定された概念ではなく、動的なものなのである。

アイデンティティの種類は、識別すべき脅威の数だけ存在するため、各アイデンティティは自らの存在を定義するために、他のアイデンティティと競う。

つまり、アイデンティティと安全保障をめぐる闘争は、物理的暴力の行使だけでなく、言説（知識など）の生産と普及、他者を疎外する実践、そして自己管理にも及ぶ。この意味で、安全保障は逆説的に解放を妨げ、ひいては真の安全保障を阻むこともあり得る。個人の恐怖や収奪からの自由に悪影響を及ぼすこともあるかもしれない。

このような解釈は、解放を「知識の哲学的支柱、社会進歩の理論、抑圧への抵抗の実践」[20]とするブースの当初の提案を根底から覆すものであり反証である。つまり、ブースの理解では、解放は、社会の進歩的な変革が安全保障の理論と実践を通じて実現できるという信念に基づくものであったが、別の視点からみれば、安全保障という考え方は非常に問題があるといえる。

2.2 統治性としての安全保障

前節で示したように、安全保障への願望は現代の日常生活において重要な要素となっており、ブースやウィン・ジョーンズは解放の一形態として理解しているが、彼らの主張には批判もある。情報が氾濫し、政治が不安定な現代社会において、個人や集団の安全保障をどのように達成するかは極めて重要な問題である。政治学者や国際政治学者は、国内社会および国際社会における安全保障を提供するための技術、政策、メカニズムの設定、開発、標準化に大きな関心を寄せている。中でも、フーコーの「統治性」（governmentality）の概念は、監視と社会統制の合理性とその形態を理解するうえで役立つ。

安全保障研究と監視に関する学術研究は、国家（および社会）安全保障機関の理解への基礎となり、重要な示唆を与えてくれる。多くの研究者は、個人、社会、国家、或いは国境を越えた安全保障を達成するために、複数の脅威（或いは「脅威」に対する認識や恐怖）から危険を回避、予防、管理するための戦略や技術を研究してきた。多くの技術が開発され、監視システム、例えば、全地球測位システム（GPS）、媒体に電波・電磁波を用いた ID システム（RFID）、生体認証、監視カメラ、ID カード、強大な富とテクノロジーを持った企業（例えば GAFA）が構築したシステムは、急速に普及し、セキュリティの実践においてますます重要な役割を果たしている。 また、個人、集団、環境に関する情報を抽出・作成するための新技術の利用など、さまざまな電子政府の取り組

みを通じて、その監視の範囲も拡大している。

さらに、警察や治安当局は、他の(企業)組織が収集したデータを政府のデータベースに取り込む。彼らは、敵の定義が何であれ、(潜在的な)敵を想定し、追跡し、標的にする。国内および国際的な安全保障の領域では、民主主義国家も独裁国家も、自国民と外国人のデータを同様に収集している。国際テロや過激化、国際組織犯罪といった「新たな脅威」に対応するため、警察や治安当局は国境を越えて情報を共有し、最善の策について意見を交換する。

このような安全保障の実践は、国境を越えた協力とグローバル化によって可能となり、広範かつ高密度なデータベースが世界中で収集、分析、共有される。その結果、私たちは、共有された倫理的価値観、課題、テクノロジーに牽引され、監視テクノロジーが私たちの日常生活に組み込まれ、さまざまな人々にさまざまな形で影響を及ぼしながら、統一されたグローバルな監視社会へと向かっている。

監視とは、デイヴィッド・リオン(David Lyon)が定義するように、「データを取得した人々に影響を及ぼしたり管理したりする目的で、識別可能か否かを問わず、個人データを収集し処理すること」である[21]。この観点において、監視には「管理」と「ケア」というふたつの側面がある[22]。トニー・ウェラー(Toni Weller)によれば、それは「戦争と福祉の実践」である[23]。国家は市民を内外の脅威から守るため、潜在的な犯罪者を管理することで市民を守るためにデータを収集する。このように、安全保障(と監視)は、政府が人々の幸福を守るために必要な措置として理解されており、それはまた人口管理の一部でもある。

その一方で、監視は安全保障とガバナンス、そして市民の自由とプライバシーに関する多くの問題を提起する。ビックデータの普及は何を意味するのだろうか。私たちのプライバシーは危険にさらされているのだろうか。こうした問題はいずれも広く世間や研究者の間で関心を呼んできた。リオンは「(監視)技術を社会のリスク管理に応用すること自体がリスクと解釈される」可能性があり、プライバシーや自由の侵害につながると指摘する[24]。

同様に、「統治性」の概念に関するフーコーの議論も、いわゆる「ケア」に関連する問題を指摘している。フーコーによれば、ヨーロッパにおける統治システムは、資本主義の発展、「人口」という概念の出現、人口拡大や健康、生産性の管理に関連するさまざまな知識や技術とともに、十八世紀に始まったとされる。概して「統治性」とは「人口管理の政治技術」(political technology of

population management)と定義することができ[25]、そこでは生命（身体、健康、ジェンダー・アイデンティティなど）が個人や集団の管理の対象となる。フーコーはインタビューの中でこうも述べている。

> 権力関係を、自由の状態と支配の状態との間の戦略的ゲームとして区別しなければならない。 そしてその間にあるのが統治の技術である[26]。

ここでは、自由(liberties)、支配(domination)、統治(government)という三つのタイプの権力関係をみることができる。第一に、自由と権力の間の戦略的ゲームは、「自由な個人の行動に影響を与える総体的構造」であると考えられている[27]。この権力は、選択肢を持つ人々の行動に影響を与える可能性のある道具、技術、過程に具現化されている。権力の目的は彼らの選択に影響を及ぼすことであるが、権力が行使されるところには抵抗がある。抵抗が引き金となり、権力の技法が改善されたり、修正されたりする。

第二に、支配（あるいは我々が通常言うところの「権力」）を伴う戦略的ゲームとは、「非対称的な権力関係において、従属的な立場にある者は、権力の影響によって自由が極端に制限されるため、自由に行動する余地が非常に限られる」ことを指す[28]。この場合、支配とは権力を行使する特殊な形態であり、「権力に対する極端な糾弾」（an extremist denunciation of power）である[29]。

第三に、フーコーは「統治（government）」という用語を「行為の遂行」（the conduct of conduct）、「ある人やその人の行動を形成し、指示し、影響を及ぼすように設計された活動の形態」と定義している[30]。特定の人々の行動を規制し、彼らの行動の可能性の場を構造化することである[31]。フーコーは「統治」という用語に非常に広い意味を与え、次のように述べる。

> 統治とは、政治的構造や国家の運営だけを指すのではなく、むしろ、個人や集団の行動を方向づけることができる方法を指すのである[32]。

さらにフーコーは、自己の統治、家族の統治、国家の統治の間の連続性を指摘する。フーコーは、政府の仕事は、上向きと下向きの両方向に連続性を生み出すことだと論じる。上向きとは、国家を統治するためには、まず自分自身を統治することを学ばなければならない。下向きとは、国が

うまく機能していれば、一家の主は自分の家族と財産を大切にする術を心得ている。つまり、個人は自分のすべきことをするようになる。

言い換えれば、「統治」という言葉は他者の統治だけでなく、自己の統治をも指す。組織のガバナンスだけでなく、人とそれに関連するモノのガバナンスも含まれる。このように、ガバナンスは人とモノの複合体に対して行使される。 この複雑さは、船を統治する例によって説明できる。

> 船を管理するとはどういうことか。それはもちろん、船員だけでなく、船とその積荷を管理することを意味する。船を管理するということは、風や岩や嵐を考慮に入れるということでもある。…船員たち、…船、…積荷、そして風や岩や嵐など、あらゆる状況との間に関係を確立するという活動によって成り立っているのだ[33]。

この点で、フーコーの統治性の概念は、マキャベリ的な権力の概念(君主制の主権権力)から逸脱している。フーコーにとって、君主制の主権権力の概念は、主権を通して安全と秩序を維持することに関わり、国家の目標は主権者がその領土と国家の臣民を支配することを維持することである。これとは対照的に、統治性権力は人とモノの複合体や、自己と他者を同時に扱う。言い換えれば、統治性権力は国家機構の人口と、人口が含む制度、組織、プロセスの管理に関わる。

加えて、主権を外的かつ一元的なものとみなす君主制の主権権力とは対照的に、フーコーの見解では、統治性権力の実践は多様であり、社会に内在するものである。フーコーによれば、君主は相続や征服によって公権力を獲得するが、いずれにせよ君主は公権力の外部にとどまる。彼はその一部を構成してはいないのである。しかしフーコーは、統治性権力の実践は多様であり、多くの人々が関わっている。さらに重要なことに、それは国家や社会に内在するものであると論じる[34]。

つまり、フーコーは統治性を、社会の内部にあって「人とモノ」に対して行使され、人々の富と幸福を促進し、人口の領域内で環境を規制する近代的権力の一形態と見なしているのである。統治性へのアプローチは、あらゆる社会制度や慣行においてさまざまな方法で実施されており、国家機関を通じた政府の管理は、統治性の戦略全体の一部にすぎない。

したがって、フーコーの理解では、「安全保障」(より正確には、安全保障制度)という用語は、

個人の福祉や健康を管理するために集団全体に適用される。この文脈において、統治性とは、個人の自由を通じてのみ、またそれに依存してのみ行使されうる統治形態として認識される。優れた統治形態は、ある種の個人の自由を確保し、人々の移動を管理し、リスクの発生を防ぐ必要がある。この意味で、安全保障は権力の運用に必要な手段としての自由を維持する。つまり、フーコーの観点からすれば、危険、脅威、恐怖からの解放は、別の形態の支配へとつながっているのである。

言い換えれば、解放という概念はブースには反権力とみなされているが、フーコーの視点から見れば、それは権力を操作する道具であり効果なのである。皮肉なことに、主体を支配から解放しようとする過程で、実は主体を権力関係の中に置くことになる。主体は何らかの形で自らを解放すべきだが、その代わりに従順な個人となってしまうのである。統治性は、「人口をその対象とし、政治経済をその主要な知識形態とし、安全保障装置（apparatuses of security）をその主要な技術的手段とする」[35]。民主主義的であれ権威主義的であれ、権力者は住民に安全を提供すると主張するが、同時に住民を統治するためにそれを利用するのである。

3.『サイコパス』における権力と安全保障の制度

前述したように、フーコーの統治性とは、人口の成長、健康、生産性の管理に関連する知識と技術の集合体である。この統治性という概念は、安全保障のさまざまな形態と技術について考えるうえで非常に有用である。この節では、『サイコパス』を思考実験としてとらえ、アニメに示された統治性権力と安全保障のさまざまなメカニズムを特定し分析することで、安全と権力と自由の相互関係について考えてみたい。

3.1 監視と福祉

フーコー的な統治性は、『サイコパス』の物語の中で鮮やかに描かれている。フーコーが「安全保障」を「統治性」と理解したのと同様、『サイコパス』における安全保障は、人々の生活、心身の健康や行動を管理するために社会全体に適用される。高度な情報技術と人々の行動に関する知識は、安全保障装置の不可欠な部分を形成しており、安全保障のために生命と健康を効果的に管理すること、特にリスク管理と予測は、安全保障と社会秩序を維持するために不可欠である。フ

ーコーは、監獄における監視塔(パノプティコン)を、社会全体に適用される監視のメタファーとして使用したが、『サイコパス』において、シビュラシステムはパノプティコンの概念をデジタル化し、拡大したものと捉えることができる。

シビュラシステムは、日常生活の個人データを収集、分析、処理することによって、人々の行動や心理を監視する大規模な監視・福祉システムである。このシステムは、社会秩序に対する現在および将来のリスクを評価し、社会に対する潜在的な脅威を事前に排除するための予防措置を講じる。このシステムは、誰が正常か異常か、誰が潜在犯か、誰が社会に対する直接的または将来的な脅威であるかを識別する。また同時に福祉システムとして、個人の健康、福祉、さらには適職や社会的地位までを管理する。

興味深いことに、人々はこの社会に組み込まれた大規模な監視システムが公正であり、良い社会は人々の安全と幸福を最大化し、あらゆるリスクや不確実性を最小化すべきであると信じている。シビュラシステムは、膨大なデータに基づき人々の行動と心理状態を監視する。「サイコパス」と「犯罪係数」が街のいたるところに設置された監視カメラのような装置で記録される。

「サイコパス」とは、人の心理状態を色で視覚化したもので、その人のストレスや心理状態を示す。ストレスが大きいほど、あるいは精神的に病んでいる人ほど、サイコパスの色は不透明となる。心の健康を維持するために、人々は学校、職場、病院などで定期的に検査やカウンセリングを受けなければならない。

「犯罪係数」とは、ある人が犯罪を犯す確率を示すもので、その数値が正常値の 100 を上回ると潜在犯と判断され、公安局は逮捕、隔離施設への移送、抹殺のいずれかの処置をとる。すべてのデータはシビュラシステムによって記録され、処理される。

シビュラシステムとともに監視官や執行官が携帯する特殊な武器「ドミネーター」も社会の安全装置として重要な役割を果たす。ドミネーターは、シビュラシステムと連動し、標的の犯罪係数に基づいて容疑者や潜在犯の取締りや処分に使用される。ユーザーがドミネーターを標的に向けると、瞬時に標的のサイコパスを読み取り、そのデータをシビュラシステムに送信する。システムは、容疑者や潜在犯への対処方法を指示し、リスクを計算し、適切な対処法を判定する。犯罪係数が標準レベルを超えた場合、ドミネーターは、対処方法を決定後、ユーザーに指示し、標的を麻痺させたり射殺したりする。つまり、ユーザーには判断する力も能力もなく、シビュラシステムとドミネ

ーターがリスクを全面的に評価し、監視し、取締り、ユーザーに権限行使を許可するのである。

ドミネーターは視覚的にも強力だ。ユーザーが手にすると、強い青い光を発し、ユーザーの目に反射する。シビュラシステムとドミネーターは作品の中で、知識と安全の権威あるシンボルとして機能しており、市民は知識全体が完璧であるというシステムの判断を全面的に信頼するよう求められる。システムの背後にあるとされる心理学と犯罪学に関する蓄積された科学的知識を使用すれば、公安局は治安維持の名目で危険人物を逮捕したり抹殺したりすることができる。

物語の中でシビュラシステムとドミネーターのアルゴリズムについてはほとんど明かされていないが、興味深いことに、大半の国民がこのシステムとさまざまな監視技術に依存し慣れきっている。人々は、システムが自分たちの生活から不安、恐怖や脅威を取り除き、その結果、治安や社会秩序が改善されたと確信している。「安定した繁栄、最大多数の最大幸福が実現された現在の社会」が成立したと信じているのだ（第十三話）。システムは社会全体に当たり前のように浸透しており、それがない生活を想像するのは難しい。システムのない生活は、不確実で、不安定で、無秩序だ。例えば、最終話で、主人公の常守朱は、シビュラシステムが公正な福祉システムではなく、権威主義的な管理装置であることを知った際、それでもシステムに留まることを決意し、「今の世の中がシビュラ抜きでは成り立たないのも事実」と認める（第二十二話）。

ただし、本広総監督も脚本を担当した虚淵玄も、『サイコパス』のユートピア的ヴィジョンと反ユートピア的ヴィジョンの間には曖昧で矛盾した関係があると明言し、『サイコパス』の世界を単純な反ユートピア的世界として描きたくはないと述べている。虚淵が言うように、サイコパスは管理社会への批判ではなく、管理によって人々が安全で幸せになる世界について描いている[36]。同様に、本広監督は『サイコパス』について「数字に全て支配されている世界、でもそれがストレスではなくて、むしろユートピアとなっている。そんな社会の警察もの」と説明している[37]。『サイコパス』の世界は「いわゆるディズニー的なものとグーグル的なものが発達した未来」だという[38]。シビュラシステムが人口を徹底的に管理するため、このような社会は非常にクリーンで安全な空間であり、人々は自分の生活について悩んだり、自分で選択したりする必要がない。重要なのは、この世界では不確実性と不安がリスクとして認識されていることである。したがって、大規模な監視は安全とケアをもたらし、監視システムのない一角は自由な空間ではなく、危険な空間と表現される。

3.2 規律・訓練と自己管理

フーコーは、監獄における監視塔(パノプティコン)を、社会全体に適用される監視のメタファーとして使用したが、『サイコパス』におけるシビュラシステム、サイコパススキャナーやドミネーターを含む大規模な監視システムはパノプティコンの概念をデジタル化し、拡大したものと捉えることができるだろう。フーコーは、法学者ジェレミー・ベンサムの設計したパノプティコンを例に、権力の概念とその行使方法を説明している。このベンサムによるこの環状の監視塔は、より強制的な暴力から受刑者を解放する自律性の形態であった[39]。したがって、ベンサムにとっては、肉体的暴力から受刑者を守るための道具として機能したのである。

しかし、ベンサムとは異なり、フーコーはパノプティコンを繊細な強制の形態、自己と他者を統治する方法、つまり規律・訓練的な権力の行使としてとらえている。フーコーによれば、ベンサムの設計は、受刑者を意識的、継続的、永続的に観察される状況に置く。それゆえ、権力は「可視的」であり「検証不可能」である。

> 可視的:受刑者は常に中央の塔の背の高いシルエットを目にし、そこから彼を覗き見る。 検証不可能:受刑者は自分が監視されているかどうかをいかなる時でも知ることはできないが、監視される可能性が常にあることは確証している[40]。

よって、権力は「所有されるべきものでも、譲渡されるべき財産」[41]でもなく、実際には遍在的で繊細なものなのである。権力は、「身体、表面、光、視線の、ある特定の調整された配分の中に、その内部メカニズムが個人を捕らえる関係を生み出す配置の中に」存在する[42]。フーコーの見解では、パノプティコンは装置が自らを監視するためのメカニズムを備える可能性さえある。

> この中央の塔の中で、院長は、看護師、医師、監督、教師、警備員など、すべての従業員を監視することができる。院長は、常に彼らを判断し、彼らの行動を変えたり、院長が最善と考えることを彼らに課したりすることができるだろう。 また彼自身の運命もこれと密接に結びついているのではないだろうか[43]。

『サイコパス』では、隔離施設や潜在犯の生活において、規律・訓練的な権力が重要な意味をもつ。その好例が、シビュラシステム公認の元ミュージシャンの六合塚弥生執行官だ。音楽に深くのめり込んだ彼女は、サイコパスが悪化し、サイコパスを回復させるために隔離施設に送られる。隔離施設で潜在犯は拘束され、常に監視され、サイコパス回復のために薬物が投与される。 部屋はモニターで埋め尽くされ、数字や図表、色彩でリアルタイムのサイコパスが表示される。サイコパスが悪化すると、鎮静ガスが自動的に作動し、さらに薬物治療を受けなければならない。しかし、この施設では潜在犯は監視下の個室で自由に生活することができる。サイコパスが安定している限り強制的な暴力を受けることはない。潜在犯は規律化され、こうした慣行を通じて彼らは規律・訓練的な権力の従順な主体となる。

このように、支配は直接的な抑圧によってではなく、より無形かつ規律化された従順な方法によってなされる。個人の行動はあからさまな抑圧ではなく、規律化戦略を通じて調整される。個人は従順な主体を生み出すために、継続的で繊細な形態の権力を通じて自らを調整する。このように、権力は個々の受刑者をより秩序正しく、従順で、有用で、効率的であるように訓練しようとする。そして、彼らを「善良な市民」へと規律化し、更生させようとするのである。

3.3 生権力（biopower）

『サイコパス』は、規律・訓練的な権力に加え、フーコーの統治性に関連した概念、生権力（biopower）―近代に発展した生に積極的に介入しそれを管理し方向付けようとする権力―の働きも鮮やかに描いている。シビュラシステムは、人々の心身の健康を保障し、個人データの詳細な分析に基づいて人口を管理する包括的な福祉システムと考えられている。多くの人々は、シビュラシステムが自分にとって最善の選択を提供してくれると信じているため、システムの判定と評価を受け入れ、心身の健康を維持するよう努める。

例えば、主人公の常守朱のようにサイコパスがクリアな人を指す「サイコ・ビューティ」は、『サイコパス』の世界では新たな美の基準となっている。 友人たちは彼女のことをメンタル美人と呼び、感情ケアをあまり必要としない彼女を羨ましがる。人々は定期的に自分のサイコパスを検査し、心の健康を維持するためにサプリメントを摂取する。ストレスレベルが高まれば、投薬や治療を受けて心理状態を整える。

さらに、パーソナル・アシスタントなどさまざまな機器を通じて自分自身や環境に関する情報を常時受信し自己管理に努める。例えば、第二話で、朱はパーソナル・アシスタントのキャンディと以下のように一日を始める。キャンディは毎朝朱の健康状態をチェックし、心理状態を良好に維持するようアドバイスする。「おはよう！…今朝の常盛朱さんのサイコパス色相はパウダーブルー！ 健康な精神で素晴らしい一日を楽しんでね！」キャンディはまた、今日の天気や予定を朱に伝え、昨日摂取したカロリーと朝食の推奨量を知らせる。天気予報のように、街で予想される集団のストレスを予測し、精神的なダメージを防ぐためにサプリメントを摂取するようを提案する。キャンディはふわふわしたピンク色のクラゲのようで、陽気で人懐っこくかわいい。

常守朱とキャンディのやりとりは、権力や支配の実践というよりはむしろケアのひとつに見えるが、常守朱と彼女のアシスタントであるキャンディの力関係は実際にはより複雑だ。キャンディは実際には常守朱の個人的なコンパニオンとして行動するだけでなく、常守朱の心身の状態を絶えず観察し、朱の自己管理を促す。定期的な健康チェックは、個人をより組織的、効率的、生産的な身体として維持するために行われる。

このような日常は、抑圧的な管理を生み出さないだけでなく、個人を従順な主体へと変えていく。人々は、先進的なシステムと技術が、健康を維持し、潜在能力を発揮するための最良の選択肢を与えてくれると信じている。選択肢は彼らのために用意されており、現在のシステムによる選択以上に、自分たちの生活を維持するための良い方法を想像するのは難しく、システムがあらゆる種類の不確実性、恐怖、リスクから解放してくれると信じている。興味深いことに、自由意志は『サイコパス』の世界では否定的な意味合いを持つ。なぜなら、自由意志は多くの人々にとっての不確実性やリスクを意味するからだ。

これらはフーコーが論じる生権力の実践と言える。フーコーにとって権力とは、直接的な暴力や法的抑圧、イデオロギーの抑圧だけでなく、より狡猾で注意深く主体の身体と精神を形成することを目的とした規律と正常化の戦略によっても作用する。権力の究極の目標とその効果は、あらゆる社会的・心理的異常の排除と正常化であり、心身を変容させることによって、有益で従順な主体を生み出すことである。自己管理は、社会的統制を内面化する権力の戦略であり効果なのである。

その結果、フーコーの思想では、人は政治的技術の産物として解釈され、それによって個人のアイデンティティ、欲望、身体、魂が形成される。この生権力こそが、個人を従順な主体、規律づ

けられた主体にしているのである。この点で、フーコーはブースのような国際関係学者が受け継いできた啓蒙主義の伝統を批判する。啓蒙思想家とその支持者たちは、主体を自己反省、自己認識、自己意識の源泉とみなしてきたが、フーコーは、主体とは常に従順なものであると考えたのである。

3.4 安全と可視性

『サイコパス』のビジュアルスタイルは、安全性と可視性の密接な関係も反映し、シリーズを通して背景美術や視覚効果によってその関係が強調されている。シアトルで二〇一三年に開催されたアニメコンベンション・サクラコン（Sakura-Con）の会場インタビューにおいて、塩谷監督は、『サイコパス』のビジュアルスタイルが『ブレードランナー』、『マイノリティ・リポート』、『ガタカ』、『ブラジル』など、一九八〇年代から一九九〇年代の人気 SF 映画に影響を受けていることを認めている[44]。これらの作品は、一九四〇年代から一九五〇年代にかけて流行したハリウッド映画におけるスリラーのージャンル、フィルムノワールに着想を得ている。フィルムノワールの撮影技法は「高コントラストの照明、時折のローキー照明、深い影、斜めのアングルで夜間撮影の印象を強調し、恐怖と不安の感覚を作り出す」[45]などの特徴がある。初期のノワールに触発された作品は、必ずしも古典的な映像技法を用いているわけではないが、「同じ疎外感、ペシミズム、道徳的両義性、そして戸惑いを含んでいる」[46]。

『サイコパス』ではフィルムノワールのビジュアルが多用され、夜景やネオンの街並みがシリーズを通して繰り返し登場し、不安や焦燥感を醸し出している。例えば、第一話で警察官たちが潜在犯を追う場面では、ほとんどのシーンが暗闇だ。事件の舞台は廃墟と化した街の雨の夜。 登場人物の顔は暗闇に隠れて見えないことが多いため、古典的なローキー・ライティングが使われている。うらぶれた雑居ビルで明かりが点滅する。ショットの合間には明るいネオンが挿入され、暗闇とのコントラストをなし、不安と焦燥感を醸し出す。犯罪シーンの多くは、廃墟、オフラインのドローン工場、破壊された地下鉄路線、使用されていないボイラー室など、シビュラシステムやサイコパススキャナーの管轄外で起こる。これらの犯罪シーンは、大規模な監視が行き届かないことによる不安感を描く。ノワールスタイルの演出は、犯罪シーンにおける不安と不可視の関係を鮮やかに描き出す。

このようなフィルムノワールに影響を受けたビジュアルに加え、『サイコパス』では空の色からキャラクターデザインに至るまで一体化したダークな世界を演出している。本広総監督はシリーズのテーマとしてモノトーンを採用している。例えば、『サイコパス』の世界では、澄み切った青空や昼間のシーンはほとんど登場しない。塩谷によれば、ほとんどのシーンは意図的に夜、夕方、夜明け前に設定されているそうだ。空が登場するシーンは曇りか暗いことが多い[47]。

漫画家の天野明は、シリーズのテーマに基づいたキャラクターデザインを提供する。分析官の唐之杜志恩を除き、主要登場人物の警察官は全員黒いスーツを着て、黒髪(赤、青、緑などではなく、黒や茶色など)である。アニメやマンガでは、特徴的な服装や髪型など直接的な要素によってキャラクターを特徴づけることが多いため、天野のこの選択はアニメのキャラクターデザインでは比較的珍しい。

さらに、物語の中で描かれる高度に発達したホログラム技術は、空間の視覚表現と安全や秩序というテーマとの密接な関係を示している。『サイコパス』におけるホログラム技術は人々の日常生活に深く浸透している。街並みはホログラムを通して映し出され、人々は好みの景観を楽しみ、維持することができる。また、住まいのインテリアを瞬時に変えたり、ウェアラブル・ホログラムを使用して無限のワードローブにアクセスしたりできる。ホログラム技術は、公共空間や私的空間で市民を保護・管理するために使用されている。公共空間におけるホログラムの普及は、秩序と安全の普及を示すものでもある。

逆に、都市空間のある部分にホログラムが不在か機能不全状態にある場合、それは不安と管理の欠如を意味する。前述の犯罪現場(廃墟や破壊された地下線など)のいくつかは、ホログラムが届かない地域であるため、暗く、錆びつき、安全でない場所として描かれている。『サイコパス』はまた、ホログラムのビジュアル・デザイン(歪んだ空間など)によっても、不安を効果的に描いている。例えば第五話で、主人公の常守朱と同僚の執行官狡噛と正岡が殺人犯の御堂に近づくと、御堂は潜伏しているホテルの部屋のホログラムを解読し、壁や家具、床など空間全体を歪ませる。さらに、色彩の変化やグラフィックは、不穏な音楽とともに、朱たちや観客にも眩暈をおこさせ、不安感を演出する。

つまり、『サイコパス』における安全保障とは、さまざまな監視によってのみ達成されているのである。個人のメンタルヘルスは維持され、個人的・集団的レベルで治療され、潜在犯は公共空間

から排除される。路上で暴力はほとんど見かけられなくなる。街はより安全になり、犯罪は減少し、法制度はより簡素化され、公安や 軍隊を縮小することができる。それは、高度で大規模な監視技術に基づく安全保障の一形態として理解されると同時に、フーコーが語る知識／権力による近代の統治の形態として捉えることができる。

3.5 知識と安全保障

『サイコパス』では、安全保障の体系全体が、人々の心理、生物学、犯罪傾向に関する膨大で高度な知識と、彼らの行動を管理・規正する技術に依存している。この知識は蓄積され、前述のシビュラシステムやドミネーターを含むさまざまな技術を通じて人々の管理へと応用される。『サイコパス』はこのように、知識と権力、そして権力の道具としての知識との本質的なつながりを示している。これはフーコーが繰り返し扱う課題でもある。

フーコーにとって、啓蒙主義以降に出現した近代的な人間の理性は、権力作用の主要な対象であり、理性は権力関係の中で積極的に形成される[48]。したがって、彼の見解では、理性は支配の源泉であり構成要素となっており、一方、現在の理性に基づく知識の産出は、現代の政治的・社会的統治と密接に関係している。この意味で、フーコーは知識の蓄積による進歩という考え方に異議を唱える。フーコーは次のように述べている。

> 人類は絶え間ない戦争から、暴力を法の支配に置き換えて普遍的な互恵関係へと立ち上がるのではなく、あらゆる種類の暴力を支配のシステムの中に設置し、ある種類の支配から別の種類の支配へと移行するのである[49]。

言い換えれば、啓蒙思想家たちが理性によって生み出される知識こそが人間解放のプロジェクトの要と考えられていたのとは対照的に、フーコーにとって知識とは権力の産物であり、支配の過程と密接に結びつく。フーコーは、知識が権力のメカニズムと不可分であり、知識と権力の間には循環的な関係があると論じる。つまり、精神医学的、社会学的、犯罪学における知識は、排除、監禁、監視、対象化の実践と技術を通じて、権力関係の文脈の中で産出される。言い換えれば、知識は社会的実践であり、権力の特定のメカニズムの結果であると同時に、知識の形態は、それ

らが記述し分析する社会的現実を形成しているのである[50]。フーコーは次のように述べている。

> [権力]は知識を生み出す(単に権力に役立つから知識を奨励するのでも、役に立つから知識を応用するのでもない); 権力と知識は互いに直接的に関連し合うものであり、知識分野の形成に関連しない権力関係や、権力関係を前提としない、権力関係を形成しない知識は存在しない。...権力-知識、それを貫きそれを構成する過程と抗争、それが知識の形態とその領域を決定づけるのである[51]。

権力のメカニズムは、さまざまな知の領域を生み出し、人間の特性、活動、存在、そして周囲の自然環境や社会環境についての情報を収集し、その結果、従順な身体と従順な精神を生み出す。こうして生み出された知識は権力の作用をさらに強化する。フーコーがディシプリン(discipline)という言葉を二重の意味で理解しているのは、このような意味においてである。一方では学問の分野であり、他方では処罰や訓練を通じて人々の行動を統制する方法である。ディシプリン(学問分野)で生み出される知識は、実際に社会におけるディシプリン(規律)を強化し、洗練させる。

言い換えれば、フーコーは知識を反解放的な力とみなし、知識と権力の結びつきを、自由で美しいユートピア世界ではなく、ジョージ・オーウェルが『一九八四年』で描いたような反ユートピア世界の創造に寄与するものと理解しているのだ。フーコーはこの点で、知識を解放的な力とみなすマルクス主義の知識に対する理解に異議を唱える。さらにフーコーは、知識を中立的で客観的なものとみなす実証主義を否定する。

『サイコパス』において知識と安全保障は密接な関係にある。人の身体、健康、心理、行動に関する知識は高度に発達し、人口全体の健康管理に利用されてきた。知識は人々の健康と幸福を向上させるために蓄積され、安全は人々を分類することによってもたらされる。人々の心理的健康と社会全体の心理状態を測定するために、様々な基準が開発されてきた。また、集団の健康と福祉にとってリスクがあると考えられる個人を特定し、追跡し、監視するために、さまざまな関連する知識体系が発達してきた。

知識は規律ある身体と精神を産出し、幸福と安全に関する社会的実践を通じて権力の行使を強化する。重要なのは、サイコパスでは、市民も公安も同様に、幸福と安全のためにこの知識が

重要であると信じており、権力の社会的実践に進んで関与していることである。

例えば、第十三話で公安局のトップ禾生局長は、宜野座執行官にこの制度がどのように機能すべきかをこう語る。「システムとはね、完璧に機能することよりも完璧だと信頼され続けることの方が重要だ。 シビュラはその確証と安心感によって今も人々に恩寵をもたらしている」。局長は、続けて宜野座をこう諭す。

> 君たちはシステムの末端だ。そして人々は末端を通してのみシステムを認識し理解する。よってシステムの信頼性とは、いかに末端が適正に厳格に機能しているかで判断される。君たちがドミネーターを疑うならば、それはやがて全ての市民がこの社会の秩序を疑う発端にもなりかねない。わかるかね。

局長の語りとともに、街の景観がさまざまな角度から映し出され、騒音が流れる。その後、騒音が突然止み、局長のクローズアップ・ショットに切り替わる。このシーンは、市民がシステム、ひいては社会秩序そのものを疑うことの重大さを暗示している。

シリーズを通じて『サイコパス』では知識、安全保障と権力が密接に絡みあう。人々の幸福と安全を向上させるために、様々な形の知識と技術が発達し、様々な社会的慣行を通じて人口全体に適用されている。科学的知識に基づく監視は個人の幸福と安全を向上させるために必要な手段であるとされ、潜在犯に対する政府による暴力行為は、個人の健康と安全に対する脅威への予防措置として正当化され、シビュラシステムは進歩と繁栄の象徴となる。しかし、このような進歩は権力と管理の行使と不可分なのだ。

4. おわりに

本稿では、アニメシリーズ『サイコパス』を分析し、安全保障・解放・統治の概念がいかに密接に関連しているかを考察した。またアニメを通して政治思想を研究することが有意義なアプローチであることを立証した。

ブースにとって、人間の解放は真の安全保障を達成するための一つの方法であるが、一方、フーコーにとって、近代社会で発展してきた安全保障とは、統治性という支配の一形態であり、人々

の安全、健康や生産性を確保するために知識や技術を通じて集団を管理する方法であった。

本稿の分析は、フーコーが議論するさまざまな権力の形態、すなわち、規律権力、生権力、知識などが『サイコパス』の監視の表象を通してどのように描かれているかを分析し、同作品がいかにブースの「解放としての安全保障」の議論に反論する思考実験となり得るかを提示した。『サイコパス』において、安全保障は人口管理と大規模なデジタル監視によって実現される。シビュラシステムと人間心理の科学は、日々の実践を通じて個人に適用され、人々は健康な身体と心を維持するためにこれらの基準を内面化する。つまり、『サイコパス』は、デジタル監視社会におけるフーコー的な権力の概念を映像によって強く裏付けていると言えよう。

『サイコパス』はまた、テクノロジーに牽引された監視社会に潜む危険性を警告するメタファーと見ることができるだろう。人類の幸福自由と安全を手に入れたと思ったら、実は別の支配形態に入り込んでいるのだ。こうして、権力、支配、抑圧をめぐる政治闘争は、いつまでも続くのである。

本稿は、アニメを通して安全保障に関する政治思想の議論を深めることを目的とし、既存の理論を中心に『サイコパス』を考察したが課題も残る。例えば、本稿を足掛かりとして今後同作品、または他の作品を特定の政治的・文化的文脈(例えば 2020 年代の日本社会)に置いてその今日的な意義を考察したり[52]、既存の理論に収まらない監視社会の新たな位相についての議論を展開したりすることができるだろう。

(中村麻理　なかむら　まり　東海大學日本語言文化學系)

付記

本稿は、動漫遊台灣 2024 國際學術研討會(2024 年 4 月 20 日、国立政治大学)における口頭発表に基づき加筆修正したものである。席上ご教示くださった皆様および審査員の方々に深く感謝申し上げたい。

注

[1] Motohiro, Katsuyuki, and Shiotani, Naoyoshi. [2012-2013] 2014. *Psycho-Pass Complete Series Collection*. DVD. 4 vols. London: Manga Entertainment UK.

[2]数土直志「『PSYCHO-PASS サイコパス』 虚淵玄(ストーリー原案/脚本)インタビュー前編」(アニメ!アニメ!、二〇一二年)。https://animeanime.jp/article/2012/10/19/11795.html;サイコパス製作委員会『PSYCHO-PASS サイコパス OFFICIAL PROFILING』(角川書店、二〇一三年)、144 ページ。

[3] Filippo Cervelli. 14 Sep 2022. “Mindless Happiness: Presentism, Utopia and Dystopian Suspension of Thought in Psycho-Pass.” *Japan Forum*. DOI: 10.1080/09555803.2021.1942137.
[4] Marks, Peter. 2005. “Imagining Surveillance: Utopian Visions and Surveillance Studies.” *Surveillance & Society* 3 (2/3): 222–239, 222.
[5] 同前。
[6] Kammerer, Dietmar. 2012. “Surveillance in Literature, Film and Television.” In *Routledge Handbook of Surveillance Studies*, edited by Kirstie Ball, Kevin Haggerty, and David Lyon, 99–106. London and New York: Routledge, 99.
[7] Booth, Ken. 1991. “Security and Emancipation.” *Review of International Studies* 17 (4): 313–326, 319. doi:10.1017/S0260210500112033.
[8] 同前、319 ページ。
[9] Peoples, Columba, and Nick Vaughan-Williams. 2010. *Critical Security Studies: An Introduction*. London and New York: Routledge, 23.
[10] Wyn Jones, Richard. 1999. Security, Strategy, and Critical Theory. Boulder, CO: Lynne Rienner, 77.
[11] 同前、78 ページ。
[12] Alker, Hayward. 2005. “Emancipation in the Critical Security Studies Project.” In *Critical Security Studies and World Politics*, edited by Ken Booth, 189–214. Boulder, CO: Lynne Rienner, 189.
[13] Campbell, David. 1992. *Writing Security: United States Foreign Policy and the Politics of Identity*. Manchester, UK: Manchester University Press, 2.
[14] 同前、1 ページ。
[15] 同前、9 ページ。
[16] Butler, Judith. 1988. “Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory.” *Theatre Journal* 40 (4): 519–531.
[17] Campbell 注 13 前掲書、10 ページ。
[18] Campbell 注 13 前掲書、79 ページ。
[19] Campbell 注 13 前掲書、11 ページ。
[20] Booth, Ken. 2007. *Theory of World Security*. Cambridge: Cambridge University Press,112.
[21] Lyon, David. 2001. *Surveillance Society : Monitoring Everyday Life*. Buckingham and Philadelphia, PA: Open University Press, 2.
[22] 同前。
[23] Weller, Toni. 2012. “The Information State: An Historical Perspective on Surveillance.” In *Routledge Handbook of Surveillance Studies*, edited by Kirstie Ball, Kevin Haggerty, and David Lyon, 57–63. London and New York: Routledge, 61.
[24] Lyon 注 21 前掲書、7 ページ。
[25] Ceyhan, Ayse. 2012. “Surveillance as Biopower.” In *Routledge Handbook of Surveillance Studies*, edited by Kirstie Ball, Kevin Haggerty, and David Lyon, 38–46. London and New York: Routledge, 38.
[26] Hindess, Barry. 1996. *Discourses of Power: From Hobbes to Foucault*. Oxford: Blackwell, 99.
[27] 同前、100 ページ。
[28] 同前、102 ページ。
[29] 同前、103 ページ。
[30] Gordon, Colin. 1991. “Governmental Rationality: An Introduction.” In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality: With Two Lectures by and an Interview with Michel Foucault*, edited by Graham Burchell, Colin Gordon, and Peter Miller, 1–52. Chicago: University of Chicago Press, 2.
[31] Foucault, Michel. 1983. “The Subject and Power.” In *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics: Second Edition with an Afterword by and an Interview with Michel Foucault*, by Hubert L. Dreyfus and Paul Rabinow, 208–28. Chicago: University of Chicago Press, 220-221.
[32] 同前、221 ページ。
[33] Foucault, Michel. 1991. “Governmentality.” In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality: With Two Lectures by and an Interview with Michel Foucault*, edited by Graham Burchell, Colin Gordon, and Peter

Miller, 87–104. Chicago: University of Chicago Press, 93-94.
[34] 同前、91 ページ。
[35] Foucault, Michel. 2007. *Security, Territory, Population: Lectures at the Collège de France, 1977-78*. Edited by Michel Senellart, François Ewald, Alessandro Fontana, and Arnold I. Davidson. Translated by Graham Burchell. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 108.
[36] 数土注 2 前掲書。
[37] 数土直志「『PSYCHO-PASS サイコパス』本広克行総監督インタビュー前編 『踊る大捜査線』の監督が挑む」(アニメ!アニメ!、二〇一二年)。https://animeanime.jp/article/2012/09/30/11599.html
[38] サイコパス製作委員会注 2 前掲書、141 ページ。
[39] Elmer, Greg. 2012. "Panopticon—Discipline—Control." In *Routledge Handbook of Surveillance Studies*, edited by Kirstie Ball, Kevin Haggerty, and David Lyon. London and New York: Routledge, 24.
[40] Foucault, Michel. 1977. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. New York: Vintage Books, 201.
[41] 同前、177 ページ。
[42] 同前、202 ページ。
[43] 同前、204 ページ。
[44] Lamb, Lynzee. 2013. "Sakura-Con 2013: Directors's Panel with Katsuyuki Motohiro, Naoyoshi Shiotani, and Atsuko Ishizuka." *Anime News Network*. March 30.
http://www.animenewsnetwork.com/convention/2013/sakura-con/5
[45] Hayward, Susan. 2013. Cinema Studies: The Key Concepts. 4th ed. London and New York: Routledge, 149-150.
[46] Conard, Mark T. 2009. The Philosophy of Neo-Noir. Lexington, KY: University Press of Kentucky, 2.
[47] サイコパス製作委員会注 2 前掲書、100 ページ。
[48] Foucault, Michel. 1984. "Nietzsche, Genealogy, History." In *The Foucault Reader*, edited by Paul Rabinow, 76–100. New York: Pantheon Books.
[49] 同前、85 ページ。
[50] McNay, Lois. 1994. *Foucault: A Critical Introduction*. Cambridge: Polity Press, 108.
[51] Foucault 注 40 前掲書、27-28 ページ。
[52] 『サイコパス』を現代日本社会の文脈で解釈した論考としては Cervelli 注 3 前掲論文を参照。